大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

エコフェミニズムの今日的意義：再生産労働の視点から (コメント 2014年度コロキウムより)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-04-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊田, 久美子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14913

コメント――2014年度コロキウムより

エコフェミニズムの今日的意義：再生産労働の視点から

伊田　久美子

私たちの世代にとってエコフェミ論争は非常に印象深いものがあります。エコフェミ論争は日本のフェミニズムの方向性に大きな影響を及ぼしました。福永論文も指摘していますが、その後のフェミニズムにおいて、エコロジーへのアプローチにブレーキがかかる傾向が出て来たことは否定できません。福永さんの世代のこのテーマへの取り組みは、今日エコフェミのアプローチが切実に必要とされていることを示しています。大災害や原発事故などの、生命が脅かされる場面において、矢面に立たざるをえないのは、今も多くの場合女性ですが、日本における長年の空白は、この分野におけるフェミニズムの議論を深める機会を逸してきたのではないでしょうか。

私はこの論争と断絶を経験した立場から、同時代のフェミニストたちのこの論争と批判の先鋒に立った上野千鶴子さんの議論への共感をふまえながらも、上野さん自身が議論をリードしてきたマルクス主義フェミニズム（の一部）によって用いられるようになった「再生産労働」概念のエコフェミニズムへの発展可能性が不可視化していったと思われる経緯を指摘し、それによって取り残した諸課題に今日あらためてフェミニストが直面していることを述べて、このフェミニズムの新たな展開の可能性を有する論考へのコメントとしたいと思います。

長年女の声は、福永さんの言うところの「他者の生を預かる」者の立場からでなければ聞く耳をもたれず、女の自己主張は「わがまま」と見なされてきました。第二波フェミニズムの「個人的なことは政治的である」とならぶ「一人称の政治」というスローガンは、「政治」の定義をめぐる公私区分への異議申し立てであるとともに、役割としての女性からの解放の

主張であったと言えるでしょう。青木やよひさんの「女性原理」に対して、同じ時期にブームになっていたイリイチのジェンダー概念とともに、それがいかに本質主義的な意味付与とは異なるという説明が繰り返し付加されたとしても、女性を役割に還元しようとする前近代モデル回帰疑惑を拭うことはできなかったのです。

しかし「一人称の政治」は他者とのつながりを断ち切った「個の政治」ではありません。この役割が不可視の必要労働であることを主張したのが、そのニュアンスはさまざまではありましたが、マルクス主義フェミニズムと呼ばれる潮流でした。「再生産労働」とは、生殖と労働を重ねることによって、「他者の生を預かる」ことが役割であるだけでなく、世界を支え維持する労働であることを示したものであると言えます。「役割」からの解放は担ってきた役割の否定ではなく、自然に還元されえない社会的営為としての再定義であると思います。しかし「労働力」としての人間の定義は資本主義社会の実態を暴いているにもかかわらず、生命を産み育て看取る営みを「労働」に、人間を「労働力」の容器に貶めるのか、という批判は、伝統的家族観の持ち主だけでなくフェミニストの側にも根強く存在していると思います。とりわけこの語が喚起する、女性が役割として求められ応えてきた情緒的絆の脱神話作用への違和感や反発は、再生産労働概念が持っている資本主義的労働批判のインパクトを希薄化してしまったとも言えるのではないでしょうか。あるいはそれが再生産労働論の限界であったという見方もできるかもしれません。その後に登場したケア論はこの限界を超えたのでしょうか。「他者の生を預かる」立場も、その「生への感度」も、あいかわらず神話化リスクと無縁ではないと私は思います。そのことを端的に表しているのが、「母」に対する毀誉褒貶です。子の生を預かる立場からの母の声もまた、それが政治的に不都合であれば、「女のわがまま」と見なされてしまうことは、「母子」で表象される自主避難者に対する無理解と反発の言説に表れています。安保法制に反対する集会デモに幼い子連れで参加する母たちへの批判も同様です。「生への感度」が女性たちに異なる決断を促し、対立させられてしまう現状において、ケアの倫理が排除に転換しかねない危うさもまた相対化されなければならな

いでしょう。しかし重要なのは、決断をしているのが女性たち自身であることであり、夫の判断や親族の意見に翻弄されたり、ましてや共同体や国家の都合に従っているのではないということです。しかしそこでは出産育児の個人化、私物化と、女性にその責任を担わせる自己責任論との対峙が問われています。

今年は日本においても人びとの大規模な運動が顕在化しましたが、共通する視点はまさに福永さんのいう「生への感度」であると言えるでしょう。それが女性に代表されながら女性だけのものではなくなる見通しがおぼろげながら見えているように感じられなくもない今日、エコフェミニズムの再検討と再構築は、フェミニズムの新たな段階を切り開く可能性を持っていると考えます。